

社会学分野

第1節 社会学教育における学士力の考察

社会学は、多様な人々が市民としての権利を尊重される自由で公正な社会の実現を目指して、そこに生起する問題を発見し、人々に呼びかけ、連帯・協働して解決を図ることを使命とする。

現代社会は、一方でグローバル化、情報化のもと、従来の枠組みでは対処できないリスクを抱えており、他方で社会を支えてきた家族・組織・地域社会が形骸化し、個人化や自己責任化の傾向がみられる。こうした状況に対して、年齢・性別・国籍など異なる立場の人々が、既存の制度や枠組みを乗り越えて共生していくための基盤をいかに作り上げるかが重要な課題となっている。

このため社会学教育では、通常見過ごされるような問題を人々が生活して関係し合う現場から発見し、そこで見出した事実を根拠に分析を加え、社会の構造を的確に把握して身近な私的問題と構造的な公的問題を関連付けて認識する。加えて他の学問分野や社会の多様な立場の人々に、その知見を発信し、異なる認識を受け入れ、対話を通じて問題解決を目指す。

そこで、社会学教育における学士力の到達目標として、以下の五点を考察した。

第一に社会における様々な問題に関心を持つとともに、通常は見過ごされている現象を社会的な問題として発見する視点を持つことができること、第二に社会秩序を形成・存続・変容させる日常の営みについて、基礎的な理論を踏まえて理解できること、第三に現代社会の成り立ちと変動を産業化、都市化、情報化といった歴史的な枠組みから捉え、社会現象をこれらとの関連において理解することができること、第四に社会的な問題に対し、現場の視点に基づいた実証的な調査によってデータを収集し、根拠のある分析ができること、第五に社会の在り方についてヴィジョンを持ち、社会的な問題の解決に向けた提案を行うことができることとした。

【到達目標】

1

社会における様々な問題に関心を持つとともに、通常は見過ごされている現象を社会的な問題として発見する視点を持つことができる。

ここでは、社会的な問題を自ら発見できるようにするため、従来社会学が対象にしてきた貧困、差別、人権侵害などの問題のみならず、これまで常識として見過ごされてきた現象にも疑問を持ち、問題として認識しようとする姿勢を身につけさせねばならない。そのため、自分自身が社会の中で感じる問題を表現できるようにすることを目指す。

【コア・カリキュラムのイメージ】

社会学原論、社会学史、理論社会学、社会学研究法、演習など

【到達度】

- ① 社会学でこれまで何が問題とされ、どのような視点で研究されてきたかについて理解できる。
- ② 「当たり前」とされている現実を改めて疑問視し、見過ごされている現象を問題として認識することができる。
- ③ 社会的な問題になり得る事象について、適切なアプローチ方法を検討することができる。

【測定方法】

- ①は、筆記試験、レポートなどにより確認する。
- ②と③は、具体的なテーマをめぐるディベート、グループディスカッションなどを通じて確認する。
- ①から③は、卒業論文、卒論報告会、合評会などを通じて確認する。

【到達目標】

2 社会秩序を形成・存続・変容させる日常の営みについて、基礎的な理論を踏まえて理解できる。

ここでは、自由で公正な社会秩序の条件を探るため、日常的な営みを社会構造と関連付けて理解できるようにさせなければならない。そのため、抽象的な理論やモデルに対する理解を深めさせ、自己の認識と他者との関わりから生じる問題を読み取れるようにすることを目指す。

【コア・カリキュラムのイメージ】

アイデンティティ論、コミュニケーション論、エスノメソドロジー、ジェンダー論、差別・逸脱の社会学など

【到達度】

- ① 人間の自我やアイデンティティがコミュニケーションを通じて形成される過程を理解できる。
- ② 相互行為やコミュニケーションによって秩序が形成・存続・変容する仕組みを理解できる。
- ③ 社会秩序の持つ権力性と秩序からの逸脱の持つ問題性を把握できる。

【測定方法】

- ①から③は、客観式・論述式の筆記試験、レポートなどにより確認する。

【到達目標】

3 現代社会の成り立ちと変動を産業化、都市化、情報化といった歴史的な枠組みから捉え、社会現象をこれらとの関連において理解することができる。

ここでは、マクロな現象が我々の日常生活とどのように関わっているかを俯瞰できるようにするため、社会の成り立ちと変動を理解させねばならない。そのため、産業構造の変化、都市における様々な問題の発生、国境を超える「ヒト・モノ・カネ・情報」の移動など、様々な現象を体系的・歴史的な枠組みに沿って理解させることを目指す。

【コア・カリキュラムのイメージ】

産業社会学、都市社会学、社会変動論、現代社会論、家族社会学、宗教社会学、文化社会学、情報社会論、メディア論など

【到達度】

- ① 社会の構成要素とその機能の関連を構造的に把握する理論的な枠組みを持つことができる。
- ② 現代の社会現象を産業化、都市化、情報化といった歴史的変動の中で理解できる。
- ③ 「ミクロ」な現象を「マクロ」な構造変動に繋げる社会学的想像力を身につけている。

【測定方法】

- ①から③は、客観式・論述式の筆記試験、レポートなどにより確認する。

【到達目標】

4 社会的な問題に対し、現場の視点に基づいた実証的な調査によってデータを収集し、根拠のある分析ができる。

ここでは、根拠のある分析をするために、妥当性と信頼性に基づいた調査が実施できねばならない。そのために、対象と目的に応じて、質的調査、量的調査などの適切な調査手法を選定・実施し、実証分析ができるようにすることを目指す。

【コア・カリキュラムのイメージ】

社会調査法、社会調査実習、社会統計学、多変量解析、フィールドワークなど

【到達度】

- ① ある社会問題・社会現象について、実証的な方法による調査計画が立てられる。
- ② 質的調査、量的調査の基本的な方法論に基づいた調査・分析スキルを活用できる。
- ③ 社会調査の調査倫理を身につけ、フィールドとの適切な関係を作ることができる。

【測定方法】

- ①と②は、客観式・論述式の筆記試験、演習などにより基礎的な知識やスキルを確認する。
- ③は、モデル及び作業仮説に基づいて計画・実施された調査の報告書などにより確認する。

【到達目標】

5 社会の在り方についてヴィジョンを持ち、社会的な問題の解決に向けた提案を行うことができる。

ここでは、逼迫した社会状況を共生の観点から見直すために、自由と公正を踏まえ透徹した視点に基づいて、政策形成など提案できるようにさせねばならない。そのため、過去の研究成果を理解し、自らの研究成果を発表させ、それに対する評価を求めて振り返りを行わせ、実現性が検討できることを目指す。

【コア・カリキュラムのイメージ】

環境社会学、福祉社会学、国際社会学、社会運動論、社会政策論など

【到達度】

- ① 社会の現状をもとに、将来の社会を構想することができる。
- ② 構想を踏まえて調査・分析を行い、その結果から問題の解決策を導くことができる。
- ③ 研究の成果を広く社会に発信する方法を活用できる。

【測定方法】

- ①から③は、論述式の筆記試験、卒業論文、卒論報告会、合評会などにより確認する。

第2節 到達目標の一部を実現するための教育改善モデル

社会学教育における教育改善モデル【1】

上記到達目標の内、「社会における様々な問題に関心を持つとともに、通常は見過ごされている現象を社会的な問題として発見する視点を持つことができる」を実現するための教育改善モデルを提案する。

1. 到達度として学生が身につける能力

- ① 社会学でこれまで何が問題とされ、どのような視点で研究されてきたかについて理解できる。
- ② 「当たり前」とされている現実を改めて疑問視し、見過ごされている現象を問題として認識することができる。
- ③ 社会的な問題になり得る事象について、適切なアプローチ方法を検討することができる。

2. 改善モデルの授業デザイン

2.1 授業のねらい

現代社会における様々な現象のなかに問題を発見し、それを自己と関連付けて捉え、自ら調べえることによってその解決を見出していく姿勢と能力は現代において極めて重要であるが、従来の大学教育の中で必ずしも体系的に取り組まれていたとは言えない。

ここで提案する授業は、共通する課題についてグループ単位で情報活動を行い、ディスカッションによって社会学的視点によるテーマを発見し、解決に向けたアプローチを体験させ、学びの成果の相互評価を通じて振り返りを行い、社会との関与の力を身につけさせることを目指す。

2.2 授業の仕組み

ここでは、初年次での教育を想定しているが、学びが4年間を通じて定着できるように、初年次教育終了後も演習を体系化して提供することを前提としている。そのために、初年次の授業で、グループによる協働学修を基本にして「自ら問題を発見し、協働を通して自ら学び、なんらかの解決を見出す」姿勢を身につけさせる。こうした授業の展開には、担当教員と上級学年生のファシリテーター*が受講学生とネット上でコミュニケーションを行い、きめ細かく学修支援を行う体制をつくとともに、他教科の教員との連携や他の教室・学外との意見交換を通じて到達度を確認する(図)。

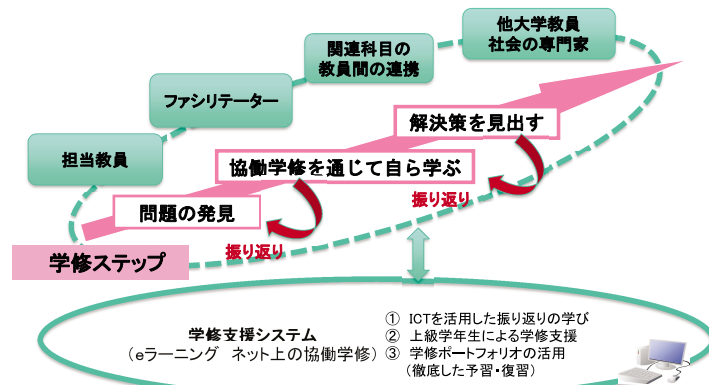


図 授業の仕組み

2.3 授業にICT*を活用したシナリオ

以下に授業シナリオの一例を紹介する。

- ① 現代社会における問題を発見する手がかりとなるテーマを設定し、それに関する情報を文献・ネットなどを利用して収集させ、現場で起こっている現象についての理解を得させる。
- ② そのテーマに対して、どのような問題設定でどのような調査が可能かを教室で討論するとともに、授業時間外もネット上でグループ討論し、グループ内外での議論の様子を可視化する。
- ③ 他のグループの学びを参考とし、相互にコメントを加えながら、各グループが現場での調査を行い、グループごとに見出した成果をまとめさせる。
- ④ グループ間で成果の報告を対面やネット上で行い、グループ間での相互評価及び社会からの外部評価を受け、振り返りを行わせ、発展的な学修に結び付ける。

2.4 授業にICTを活用した学修内容・方法

以下に学修内容・方法の一例を紹介する。

- ① 授業冒頭に「パブリック／プライベート」という課題を設定し、これをめぐるデータや映像などを文献・ネット上で収集し、それを踏まえて論点整理を教室内及びネット上で展開させて、グループ形成を行う。
- ② 課題から個別のテーマ設定、資料の共有、ディスカッションなどを対面またはネット上でグループで行い、学修支援システム*を利用してファシリテーターが学びを支援する。
- ③ グループごとに、例えば、電車内における音楽プレイヤーの使用や化粧など公的空間と私的空間の境界に関わる現場や福祉サービスにおける官民の役割分担に関するメディア報道の分析などの適切なアプローチ方法を検討させる。
- ④ 学生自ら収集した一次情報やメディアを利用した二次情報を集約し、その結果を分析することから見出せる解決方法をグループで議論した上で成果としてまとめ、テーマと自己との関連付けを明確化させる。
- ⑤ グループの協働作業で学んだ成果を対面やネットを通じてグループ間で報告、発表し、相互評価をさせる。
- ⑥ 全体の成果をネット上で発信し、社会の意見を踏まえて振り返りを行わせる。

2.5 授業にICTを活用して期待される効果

- ① ネットを通じて自分の意見を発表し、他のメンバーの意見を知ること、問題を発見する複眼的な視点を身につけることができる。
- ② ディスカッションやプレゼンテーションなどをネット上で可視化することで、問題解決に必要なコミュニケーション能力やグループワークでの協働能力を高めることができる。
- ③ グループ間・クラス間での情報共有・意見交換を可能にする学修支援システムにより異なる視点を知り、それと対話する姿勢を身につけることができる。
- ④ 学修成果を対面やネットで相互評価することで、社会との関わり方を身につけることができる。

2.6 授業にICTを活用した学修環境

- ① 教員コンソーシアムを形成し、リアルな情報収集・交流を可能とする教育クラウドを整備する必要がある。
- ② 学修を支援するための上級学年生によるファシリテーターが必要である。
- ③ 学内の教員間の連携を図るためのプラットフォーム*を構築する必要がある。

3. 改善モデルの授業の点検・評価・改善

この授業では、受講生による評価のみならず、ファシリテーターによるフィードバック、教室の枠を超えた学生・教員間の連携を、点検・評価・改善の視点とする。その際、テーマ設定や進行、教員間の情報共有の場を設けるとともに、履修後の学修状況を検証することで、点検・評価・改善の実効性を高める。また、他大学教員や専門家などの外部コメンテーターや大学間コンソーシアムとの意見交換を通じて、教員・学生の視点の相対化を図るとともに、適切な緊張感を保った授業運営を目指す。

4. 改善モデルの授業運営上の問題及び課題

- ① グループによる協働学修を基本にした4年間の学びを通じて発展的な学修ができるようにするために、上級学年生によるファシリテーターの制度化が必要である。
- ② 他教科の教員との連携のためのコミュニケーションシステムを大学ガバナンスとして構築しておく必要がある。
- ③ 個人情報の保護、プライバシーなど情報の取扱についての合意形成が不可欠である。

社会学教育における教育改善モデル【2】

上記到達目標の内、「社会の在り方についてヴィジョンを持ち、社会的な問題の解決に向けた提案を行うことができる」を実現するための教育改善モデルを提案する。

1. 到達度として学生が身につける能力

- ① 社会の現状をもとに、将来の社会を構想することができる。
- ② 構想を踏まえて調査・分析を行い、その結果から問題の解決策を導くことができる。
- ③ 研究の成果を広く社会に発信する方法を活用できる。

2. 改善モデルの授業デザイン

2.1 授業のねらい

社会学教育においては、理論と調査という枠組みに加えて家族、ジェンダー、都市、地域、環境、メディアなど様々なカテゴリーに細分化された教育が進められるようになった結果、それぞれの科目間の連携が取りづらく、多様な理論やモデルなどが断片的に提示されるため、問題解決のための

最適な解を得る力が身についていない。

ここで提案する授業では、社会学的な観点から問題解決を提案できるようにするため、4年間を通して複教科目間の有機的連携の中でICTを活用した統合型の授業を行い、学修成果の評価を社会から受けることで自ら振り返り、主体的に社会に関与する自律的な行動基準を身につけさせることを目指す。

2.2 授業の仕組み

ここでは、現実と自己との関連付け、社会学全般の基礎知識、社会調査実習の学びを修得していることを前提とする。到達していない場合は、eラーニング*で学びの場を提供する。

社会学的な観点から問題解決を提案できるようにするために、社会学の担当教員間と他分野の教員とが連携して指導するプラットフォームを構築するとともに、学修ポートフォリオ*による振り返りを繰り返し行うことで学修目標再設定と学びを深化させる。

これを繰り返すことで主体的に社会に関与する自律的な行動基準を身につけさせる。到達度の確認を行うため、学内外の教員間の連携と産業界や地域社会等との連携を構築した上で、卒業研究をネット上で発信・評価できるようにしておく(図)。

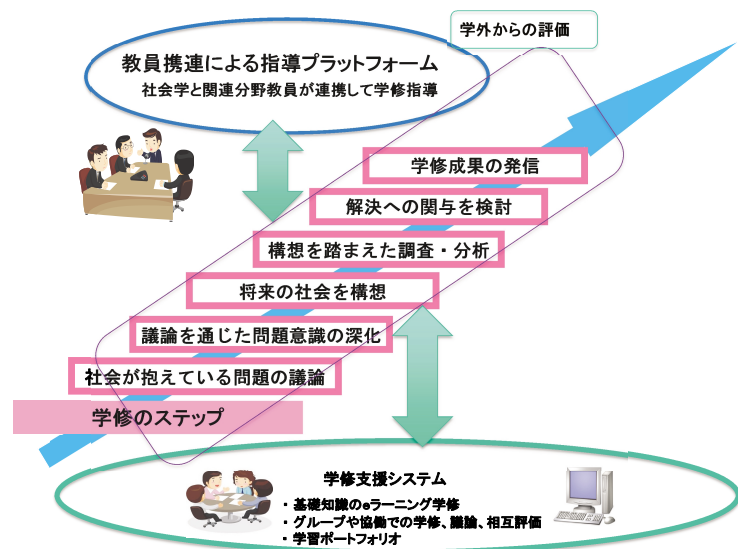


図 授業の仕組み

2.3 授業にICTを活用したシナリオ

以下に授業シナリオの一例を紹介する。

- ① 現実と自己との関連付け、社会学全般の基礎知識、社会調査実習の学びの確認を学修ポートフォリオで行わせ、到達していない場合はeラーニングで学修させる。
- ② 社会が抱えている問題について、対面やネット上でディスカッションさせ、問題意識を深化させる。
- ③ ディスカッションの結果を踏まえて学修ポートフォリオで振り返りを行いながら、将来の社会を構想させる。
- ④ 構想を踏まえて調査・分析を行わせ、対面やネットを通じた他分野・他領域との連携の中で解決への関与を検討させる。
- ⑤ 学修成果をネット上で発信し、相互評価及び外部評価により到達度を確認する。

2.4 授業にICTを活用した学修内容・方法

以下に学修内容・方法の一例を紹介する。

- ① 「若年失業者問題」というテーマに対し、家族、ジェンダー、都市、地域、メディアなどの関連領域の基礎知識との関連付けを教員作成の点検シートに基づいて学修ポートフォリオで確認させ、身につけていない場合はeラーニングさせる。
- ② さらに、社会心理学、経済学、教育学などの関連分野の基礎知識を学修ポートフォリオで確認

させ、身につけていない場合はeラーニングさせる。

- ③ 文献やメディア情報をもとに社会学の視点と他分野の視点との相違について、対面やネット上でディスカッションさせ、学修ポートフォリオを通じて複合的視点を意識できるように繰り返し確認させる。
- ④ 参与観察、インタビュー、質問紙調査などの手法を用いてグループで実態を把握させ、ネット上で情報を共有し、課題の洗い出しを行わせる。
- ⑤ 学修成果を現場にフィードバックして意見を求め、振り返りを行わせた上で広く社会に発信させる。

2.5 授業にICTを活用して期待される効果

- ① 学修ポートフォリオにより、個人的な学修の振り返りの機会を設けることができる。
- ② ネット上にファシリテーターを導入することで、問題解決への複合的視点を獲得することができる。
- ③ 学修成果を対面やネットで相互評価することで、社会との関わり方を身につけることができる。

2.6 授業にICTを活用した学修環境

- ① 教員コンソーシアムを形成し、リアルな情報収集・交流を可能とする教育クラウドを整備する必要がある。
- ② 学修を支援するための上級学年生によるファシリテーターが必要である。
- ③ 学内の教員間の連携を図るためのプラットフォームを構築する必要がある。
- ④ 学びを確認し、発展的に学修するためのポートフォリオシステムが必要になる。

3. 改善モデルの授業の点検・評価・改善

この授業では、複数の教員による評価、学生の相互評価、社会からの評価をもって、4年間の学修内容の振り返り・総合化とそれを踏まえた提言の適切さについて検証することを点検・評価・改善の視点とする。その際、ICTを用いて一定の期間、学内外に学修成果を公開して評価を求める。その結果をもとに、複数の学生及び教員で意見交換を行う場を設け、学修ポートフォリオとそれを通じた振り返りの仕組みを改善する。

4. 改善モデルの授業運営上の問題及び課題

- ① 学内での教員間の連携が図れるよう大学ガバナンスの立場から制度化する必要がある。
- ② 学びの確認と振り返りを行う学修ポートフォリオと到達度を補完するeラーニングを組織的に整備する必要がある。
- ③ 4年間の学びを通じて発展的な学修ができるようにするため、上級学年生によるファシリテーターの制度化が必要である。
- ④ 個人情報の保護、プライバシーなど情報の取扱についての合意形成が不可欠である。

第3節 改善モデルに必要な教育力、FD※活動と課題

【1】社会学教員に期待される専門性

- ① 社会の現象を社会的な問題として捉え、解決しようとする意欲と責任感を持ち、社会に貢献できる専門家であること。
- ② 社会を身近な現象と全体構造から捉えるため、複合的観点に立って探究できること。
- ③ 他分野の専門領域や社会の様々な現場と連携し、協働して課題に取り組む姿勢を有していること。

- ④ 仮説と検証を通じて社会現象を解明する科学的方法を活用できること。
- ⑤ 自分と社会とのつながりを気付かせ、興味・関心を抱かせて主体的に取り組ませられること。
- ⑥ ICTなどの教育技法を駆使して、参加・発信型の教育ができること。

【2】教育改善モデルに求められる教育力

- ① 授業のカリキュラム上の位置付けを十分に理解した上で教育方針に沿った授業を実施し、さらに工夫・改善できること。
- ② 主体的学修のための基本的スキルを身につけさせるために、問題発見、調査分析、問題解決などの授業の展開に応じた指導ができること。
- ③ 現代社会の現実を反映した教材、資料などを多様なメディアで収集または作成し、共有できるようにすること。
- ④ 社会学の知識を社会生活と関連付け、通常は見過ごされている現象を別の角度から捉える方法に気付かせられること。
- ⑤ フィールドワークやデータ分析を通して課題解決に取り組む中で、グループダイナミックスを進展させる授業シナリオに取り組めること。
- ⑥ 学修ポートフォリオにより、学修成果を振り返らせ、主体的な学びを促す指導ができること。
- ⑦ ICTを用いて学修成果を隣接諸科学の教員や社会に発信し、評価やコメントを受けられるように支援できること。

【3】教育力を高めるためのFD活動と大学としての課題

（1）FD活動

- ① 教員間の連携をもとに授業内容と教育方針との整合性の確認及び検討を継続的に行う必要がある。
- ② 教育方法に関する研究報告会に積極的に参加し、教員同士が教え合い、学び合う必要がある。
- ③ ポートフォリオ及びグループ学修や対話型授業などの指導法について、ワークショップを組織的に行う必要がある。
- ④ 到達度水準の策定や外部評価による振り返りについて、専門家の招聘及び教員間のディスカッションなどの研究会を実施する必要がある。

（2）大学としての課題

- ① 授業の録画、教材コンテンツ、ネット上のディスカッションを可能にするため、学内外の多様なコンテンツをアーカイブする必要がある。
- ② ポートフォリオを通じて学生の到達度を申告させ、到達度が不足している場合に補完する仕組みが必要となる。
- ③ 関連分野の教員や社会の専門家などから協力を得るために、連携の呼びかけ、制度の整備及び財政的な支援を行う必要がある。
- ④ ICTを活用した教育方法を支援する組織と環境を大学として整備する必要がある。
- ⑤ 世界を視野に入れた教育の質保証を持続的に行う責任がある。